錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第３１７号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2020

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：錦城の探究活動最前線
どうなる？球大ルール
二面：他校に聞くペットボトル事情
自販機設置へ、錦城は今

未来のための力を養う

１年生、学年発表会実施

大学入試制度が様々な変革を遂げる中、高校教育に求められるものもまた変わってきている。今回は、１年生の探究学習発表会、２年生の進路探究会などを取材した。

（編集部共同取材）

代表グループが調べた成果を模造紙にまとめて発表する

将来見据え新たな取り組み

１年生は夏休みの宿題で「現代社会の諸問題を考える」というテーマのもと、外交問題や環境問題、福祉問題などの自分の興味のある社会問題について「新聞切り抜き新聞」を作成した。その後、新聞切り抜き新聞のテーマが同じ人同士で５人程のグループを作り、夏休みの宿題で扱ったテーマをさらに深め、模造紙にまとめて、地理の授業でクラス内発表を行った。

この活動を主導している森本慶先生によると、探究活動を始めた理由は、大学入試改革や高大接続を意識したからだという。最終的な目標は、将来が予想できない社会で、自分で問題を解決する力を身に着けること。さらに、グループでの活動を通して、協働性を身に着けることも目指す。新聞切り抜き新聞など、探究活動そのものは以前から行っているので目新しくはないが「ここまで大がかりに取り組むのは57回生が初めてです」と森本先生は話した。

分野別発表会

２月19日（水）のＬＨＲにこの探究活動の学年発表が第１・第２体育館とホールで行われた。各クラスの代表１班が３か所に分かれて発表し、生徒は熱心に発表班の話を聞き、活発に質疑応答する場面も見られた。

異常気象について発表をしたＢ組の田口くるみさん、藤田清花さん、野口裕太くん、大村泰盛くん。発表時には聞き手にクイズを出す工夫をしていた。藤田さんは「今後進んでいく異常気象について、解決策も伝えられて良かったです」と語った。

発表を聞いた宮寺結瑞さん（１G）は、ニュースでは聞き流してしまうような内容も、詳しく説明していたため関心を持つことができたという。また「聞く側ももっと参加できるような取り組みをするとより良くなると思いました」と話した。

球大ルール変更はまだ検討中

２月７日（金）に球技大会実行委員会の集会が開かれ、各クラスのホームルームで実施されたアンケートについて話し合われた。

球技大会では、「高校入学後に所属経験のある部活動と同じ競技に参加できない」というルールがある。今回実施されたアンケートはそのルールを見直すために行われた。生徒には、経験者が競技に参加していいか否か、あるいは制限付きなら参加していいか、そしてその制限の具体的な案などがアンケートの項目にあった。

「アンケートをもとに話し合いを行う予定です」

アンケート結果は、結果に影響するとは限らないため公表する予定はないそうだ。現在、今回のアンケートを元にして委員会で話し合いが行われているところだ。

ちなみに周りの錦城生に意見を聞いてみたところ、２年Ｔくんは「出られない種目があるのも嫌だし、経験者にプレイの制限をつけたらいいのでは」と制限付きの参加に賛成。また、１年Ｎさんは「経験者がいると差がやっぱりついてしまう」と反対した。

春と秋に開催される球技大会。錦城の一大イベントがどうなっていくのかその動向に注目していきたい。（雀・鴻）

２年生は「進路探究」26日(水)には全体での発表会

現在56回生は、「歴史や文化」「データやネットワーク」など全16項目にわたって提示された分野から自分の興味に合うものを１つ選び、探究活動を行っている。

各自Ｂ４の紙を使って調べたことをまとめ、２月19日（水）にはクラス内発表が各教室で実施され、２月26日（水）には、同じ分野を選択した人同士による発表が学年全体で行われた。

この進路探究を中心となって進めている奥嶋陽翔先生に取材した。奥嶋先生は、自分が本当にやりたいことは何なのかを知ってほしい、という思いからこの進路探究の活動を企画したという。「自分の学びたい分野をすでに決めている人にとっても、この交流を通してもっと興味のあることがみつかるかもしれません。自分でも気がついていなかったことを知り、自身の幅も広がるいいチャンスになるはず」と話した。

また錦城生には「勉強方法を自分で探り、修正できるようになってほしい」と奥嶋先生。「自分の努力のやり方を記録するのに、ぜひClassiを役立ててください。振り返ることは自身の成長につながります」と伝えた。

５、６人の班で発表練習

Classi 導入から２年

56回生の入学に合わせて新しく錦城に導入されたClassi。提出率は２年間を通してどう推移しているのか、進路指導の奥嶋陽翔先生に聞いた。

56回生の提出率（２月13日時点）を見ると、入学後すぐに行われた１年１学期中間試験の目標・振り返りは９割の人が提出しているものの、約１年後の１年学年末試験の振り返りは７割を大きく割ってしまっていた。直近の冬課題テストと１月模試の目標の提出率に至っては38％と大幅に落ち込み、その振り返りと２月模試の目標の提出は36％と、56回生の約３分の１の人しか提出していないという状況だ。

奥嶋先生はこの結果に「目標よりも振り返りの提出率が低いことが意外です。重要なのは目標に沿った勉強ができたか、どう行動してきたか、など、日々振り返ること。積み重ねを読み返すことが学びにつながります」と話した。

学年	名称	提出数	提出率
1年	1学期中間考査の目標	468	90%
	1学期中間考査の振り返り	476	91%
	学年末考査の目標	397	76%
	学年末考査の振り返り	342	66%
2年	1学期中間考査の目標	408	80%
	1学期中間考査の振り返り	368	72%
	冬課題テストと1月模試の目標	192	38%
	冬課題テストと1月模試の振り返り&2月模試の目標	182	36%

56回生の１学年時、２学年時のClassi提出率

蔵王アネックスの大女将が語る 旅館での環境対策

先日２年生がスキー修学旅行で訪れた山形県の蔵王で宿泊した「蔵王アネックス」。旅館ではたくさんの紙資源を使う。そのため、宿泊客が置いていったパンフレットなどは回収をし、資源として出すこともしているそうだ。また、宿泊客の食べ残しについて「未開封のものなどは、従業員で持って帰ることもしています。私自身の取り組みとしては、全部食べられないのなら始めから手を付けないようにもしています」と教えてくれた。

「物を大切にする姿勢を心掛けて」

斎藤さんは「世界で様々な環境問題が後を立たない中、このまま放っておいたらいつか蔵王の樹氷もなくなってしまうかもしれない。孫、そのまた孫の世代まで繋げていくにはどうすればいいのか、考えなければなりません」と熱く語ってくれた。

「ものを大切にする」という姿勢を大切にするなど、身近なところから環境への取り組みを始めていこう。（槿）

今冬も活躍する部活動

将棋部

２月６日（木）～８日（土）に福島県で行われた全国高等学校将棋新人大会に将棋部の金ユリさん（２D）が出場し、女子個人戦において３勝２敗という結果を残した。

落ち着いた様子で駒を進める金さん

対局前は「関東大会の結果があまり良くなかったので、全国大会で勝てる自信は正直ありませんでした」と金さん。しかし、全国でも思った以上に相手とわたりあえたため驚いたという。また「あと１勝で決勝戦に出場できていたので少し悔しいです」と語った。

最後に次に向けて「これまでの対局を振り返り、弱点を克服していきたいです」と意気込んだ。（菘）

男子フットサル部

試合での経験を練習の活力に

男子フットサル部は２月２日（日）に第１９回東京都ユースフットサルフェスティバルに出場。東京都ベスト１６という成績を残した。

部長の牧野恭平くん（２D）によると、男子フットサル部は今回の大会に向け、練習量を増やしてきたという。練習がオフの予定だった日にも他の部活からコートを借りて練習をしてきたそう。

また、最も印象に残った試合は最後に戦った國學院久我山高校との試合だと話す牧野くん。全国大会に出場したことのある選手もいるレベルの高いチームと戦えて、良い経験になったそうだ。

次に出る５月の大会での目標は東京都ベスト４。「次の大会では今回よりも良い結果を残せるように頑張ります」と牧野くんは意気込みを語った（杏）

むらさき草

先日、教室に行くためエレベーターに乗った時のこと。２人しかいないエレベーターで、後から乗り込んできた生徒が自分のすぐ目の前に立った。だが、その生徒とは知り合いではない。他人が近い距離にいる、というこの空間はとても不快に感じた▼他人が侵入すると心理的な不快感が起こる、身体の周囲の心理的な縄張りのことを「パーソナルスペース」というらしい（コトバンクより）▼アメリカの文化人類学者のエドワード・T・ホールは、その「パーソナルスペース」を密接距離（０～45ｃｍ）、個体距離（45～１２０ｃｍ）、社会距離（１２０～３５０ｃｍ）、公衆距離（３５０ｃｍ以上）の４つに大別した。密接距離は、家族や恋人、個体距離は友人などと接する時の広さ。社会距離は業務上で上司と接する時、公衆距離は講演会などで話す側と聞く側との間に必要な距離である▼エレベーターでの距離は密接距離に近く、他人にパーソナルスペースを侵害されたことが不快の原因だったのだろう▼列に並ぶ時、日本人は前に１～２人分のスペースを空ける。しかし中国では、少しでも前の人と間が空いていると割り込まれるため、前の人と密着して並ぶことが慣習となっている。一方、フィンランドは日本よりも広い間隔を取り、４～５人分のスペースを空けて並ぶ▼初対面の人がいきなり真隣に座ってきたら、その人のことを知る前に抵抗感が生まれる。たとえどれだけ良い人であろうと今後その人と親しくなろうとは思えない▼「適切な距離」は国によって、その人によってそれぞれである。「距離」を意識して相手と接することは、心地よいコミュニケーションを築く大切なマナーだ。「親しき仲にも礼儀あり」という言葉もある。もう少し、人との距離感というものを意識してみたい。（柊）